朱印船と北前船から江戸時代を眺めてみる

千葉県立船橋高等学校　香取　宏

１．実施学年および教科領域

高等学校第２学年　日本史Ｂ

２．学習のねらいと博物館の活用との関連について

（１）主題名　　朱印船と北前船から江戸時代を眺めてみる

（２）ねらい

生徒は、江戸時代は海外との接触が少ない時代と認識している。しかし、現行学習指導要領日本史Ｂでは目標が「我が国の歴史の展開を、世界史的視野に立って総合的に考察させ」るとうたわれており、近世の社会・文化と国際関係に関しても、「ヨーロッパ世界との接触とその影響、鎖国などその後の対外関係に着目して、織豊政権、幕藩体制の特質について理解させる」と書かれている。大航海時代にあたる織豊政権から江戸時代初期にかけては、まさに世界的な視点で日本を見ることのできる時代である。

授業をしていて、生徒が日本史と世界史を別物と考えているような反応を受けることがよくある。そこで、朱印船という具体的なものを通してそこを崩していけないかと考えた。さらに鎖国に関しても、ヨーロッパ諸国との関係だけでなく、中国の海禁政策との類似性や、四つの口での外交・貿易関係のありかたなど、世界史的視野に立って理解させることがこの実践のねらいとなる。

江戸時代の社会経済史に関しても、指導要領で「幕藩体制の下での経済機構や交通・技術の発展，都市の繁栄に着目して」「農業や商工業の発展…について理解させる」と書かれており、農業や商工業の発展という視点からも江戸時代を考察することが求められている。織豊時代から江戸時代を通じて外国との関係は続いており、江戸時代の国内経済の発達が、対外貿易に影響を与えているのも事実である。

そこで、江戸初期の朱印船貿易と、鎖国体制下の貿易、それと国内産業の発達を関連付けた形で生徒に理解させられないかと考えたのが、この実践である。

（３）博物館との関連

①朱印船と北前船の模型と、それに関連する資料を実際に見ることで、そこからいろいろな情報を引き出して、自分の既知の知識とすり合わせる中で、これらが持つ意味をつかみ取って歴史認識を深めていく。

②教師による展示解説をおこなう。

３．実践の概要と事後指導

（１）事前学習

事前に、琉球王国が誕生し、明の冊封体制に入って東アジア・東南アジアを結ぶ中継貿易をおこなうことで琉球王国の黄金時代を迎えたこと、そして大航海時代とと

にポルトガルとスペインがやってきたことでその地位を奪われて黄金時代が終わり、1609年の薩摩藩の侵攻で薩摩と明への両属体制となるまでの授業をおこなっている。その知識が前提となって、以下の実践が成り立っている。今回実践をおこなった生徒は、本校のカリキュラム上の都合で、それ以前の戦国時代や織豊時代の授業を受けていない。しかし、中学校の教科書でも、南蛮貿易、秀吉の朝鮮侵略と明との戦争、朱印船貿易と主な貿易品に関しては記述されているので、一定の知識は定着していると思われる。また、江戸時代については、全く授業をおこなっていないため、今回の実践では、生徒は中学校の時に身につけた知識で展示を見ていくこととなった。さらに生徒には教科書を持ってくるように事前に伝えてあったので、教科書で確認しながら、ワークシートの質問に答えていく学習となる。

（２）第２展示室の朱印船の構造を探る

大航海時代の日本とアジア・ヨーロッパとの交流を具体的に示すものとして第２展示室に展示されている朱印船の模型を見せた。まず朱印船を横と後ろから描くことで、その構造をじっくりと観察させて、特徴をつかませた。その上で、朱印船がヨーロッパと中国の技術を取り入れて作られた船であることを理解させようと考えてワークシートで以下の質問をおこなった。

①朱印船がニンポー船と同じ構造を持つところをあげてください。また、その名称と特徴をあげなさい。

②ヨーロッパの造船技術を取り入れたところがわかる点を２つあげなさい。

①に対し生徒は、「横風や逆風に対応できるように、帆柱を左右非対称的に展開させた網代帆」「竹で編んだ帆」を挙げた。

②に対しては、「前方に長く突き出たスプリットセイル」「艦尾の舵の構造」と答えていた。また、朱印船全般に対する印象を聞いたところ、ガレオン船と雰囲気が似ているとの答えが返ってきた。一方、朱印船独自の構造である前方部の張り出しの役目は生徒には理解できないものであった。よく見ると、櫓も一緒に置いてあるのだが、生徒は櫓そのものを知らないわけで、ここは、曳き船のない港の出入りや、港内で船を廻すとき、櫓を使って船を動かすための場所であるという説明をおこなった。

（３）朱印船貿易から時代像を探る

朱印船の周囲の展示コーナーに、朱印状、朱印船の渡航先のパネル、主な貿易品などが展示されている。そこで、ワークシートで渡航先と主な貿易品を確認させた。渡航先が東南アジアであることはすぐ読み取れる。問題は主な貿易品が生糸であると知っているかどうかである。この時代の日本にとって、中国産生糸（白糸）の輸入が一番重要であった、という知識を生徒が持っていないと、展示の説明が鮫皮に関するものしかないため、貿易品を見ただけでは生糸の重要性がわからない。さらに、生糸そのものを見たことがない生徒も考えられる。その場合は、後の時代のことを考えても、ここで説明を加えておくことが必要となる。

「朱印船の渡航先が東南アジアである」ことと、「そこで一番購入しているものが中国産生糸である」と言う２つの事実から、朱印船貿易が、当時の東アジアの国際関

係とどうつながるのかつかませたいと考えて、ワークシートで「主な渡航先から考えると、これはおかしな点があります。どう考えれば説明がつくか、以下の語を使って答えなさい。明・朝鮮出兵・出会貿易」と質問をおこなった。

ワークシートでなく、その場で質問するのであれば、「なぜ直接中国に行って生糸を買い付けないのか？」というような質問になるであろう。

生徒は「朝鮮出兵で明との関係が悪くなったので、明と直接貿易していないが、出会貿易で絹などを東南アジアで買って手に入れている」、「朝鮮出兵により日本と明の関係は断絶していた為、勘合貿易が出来なかった。その為、東南アジアで商売をおこなっている明の商人と出会貿易をすることで明と東南アジアの特産品を手に入れられる一石二鳥を狙った」との答を出してきた。

両方の答えとも、日本と明との断絶状態の中で、生糸を欲しい日本がとった方法の一つが朱印船貿易であったことを読みとっている。

生糸に関しては、第３展示室で鎖国体制下での貿易品としても展示され、農村での養蚕の様子も登場する。さらに第５展示室「近代」では、中心的テーマの一つとして取り上げられている。その生糸が最初に登場するのがこの展示であるので、生糸が持つ重要性について、いくつかの質問をして確認をさせた。京都の有名な織物である西陣織は生徒も習っている。その上で、豪華な織物を作るためには、元々黄ばみが入っている日本の生糸はではうまく染め上がらず、中国特産の白糸が必要であったこと。平和の到来と共に、公家や上級武家などの女性に豪華な衣装が求められたこと。白糸の需要が非常に高かったこと。これらを説明した上で、第３展示室の女性の衣装の展示を確認させた。

（４）第３展示室「国際社会のなかの近世日本」

ここではワークシートの答えを確認しつつ解説をおこなった。まず、生糸が鎖国下でも貿易品の中心であることを展示より確認させた。そして、朝鮮通信使と琉球使節の行列を描いた絵図を見せて簡単に解説し、両者に共通している、行列を眺めている民衆の存在に注目させた上で、次の質問をおこなった。

Q・将軍のところへ挨拶に行く行列を民衆に見せるのは、どんなねらいがあるのだろうか？

将軍の権威を高めるねらいがある、ということを即答するのは厳しい。そこで、質問を重ねる中でつかませる方法をとった。最初生徒は、異国人の姿を興味深く見ている民衆に目をとめて、将軍は、一種の娯楽＝楽しみを与えてくれる存在だ、と示そうとしたと考えた。確かに庶民は行列を楽しみにはしていたが、「将軍のところへ」行く意味が説明しきれていない、この点をもう少し重要視して考えるよう指摘し、ヒントとして、どんな時に使節が来るのか確認させたところ、将軍代替わりに来ていることを見つけ出した。「将軍が新しく代替わりする事実を、外国はどうやって知るのか」、と尋ねたところ、「幕府が使節を送るように要請しているはずだ」、と気がついた。さらに、「君が民衆だったら、行列が将軍のところに挨拶に来る事実を見たら、どう思うか」と質問をしたところ、「外国が将軍に挨拶にやって来るほど将軍の権威はすごいと

民衆に思わせようとした」、と、幕府の意図を見抜いた。そして、それは幕府が権力を維持していく大事な装置になっていることもつかんだ。

（５）第３展示室の「ひとともののながれ」

ここでは、北前船を朱印船と同様に描かせて、北前船が明らかに朱印船と構造が違う＝鎖国体制下での輸送に特化した構造であることをつかませようとした。特に船底が浅い＝喫水線が浅いことは確認させたいところであった。

生徒は朱印船と比べて「帆が大きい」「船底が浅い」「船の横幅が朱印船に比べて広めな構造になっている」「サイドに柵のようなものがある」などと答えていた。さらに、「この特徴から、沿岸を航海することしかできない作りになっている。」「船の体積の1.2倍近く荷物が積めるキャパシティがあると思われる」との答えを書いており、沿岸航行用の輸送船としての特徴をつかんでいた。

次に、江戸時代に木綿が普及したことを理解させたいと考えて、帆の材質に注目させる質問をした。ここで帆の材質が木綿に替わったことを確認させたのは、生徒に江戸時代の社会や経済の発達を考えさせるときに、北前船が運んだものに注目させて考えさせようとすると、木綿が存在しているという事実が大きな助けになると考えたためである。

さらに北前船の独特の経営方法である買積経営(方式)を理解させたいと考えて、展示されているパネルから買積方式とはどんな商売なのか読み取らせた。パネルで表される商品の売買の流れがわかりやすいため、「立ち寄ったところである品物を買い、その土地に足りないものを売り、…と現地で商品を補充しながらその土地に足りない、貴重な商品を高く売る商売。」であると、しっかりと読み取っていた。

私が買積経営に目を付けたのは、北前船が単なる輸送業者ではなく、今なら総合商社にあたるような商売をおこなっている点にある。その点をさらに深く考えさせたいと考えて、以下のような宿題を出した。

Q・買積経営(方式)を実際に成り立たせていくには、ほかにどのようなことが必要だったでしょうか。たとえば、知識・情報・システムなど思いつくものをあげなさい。

木綿の普及が江戸時代の庶民の生活を大きく変えていった。さらに木綿の栽培に欠かせない金肥の需要が増したことで、北前船はその重要性を増した。北前船を中心に据えていろいろな視点から江戸時代の社会を眺めることができるのではないかと考えて、次の質問を考えた。

Q・北前船が輸送したものであなたが興味・関心を持ったものを１つ取り上げて、どんな点に興味関心を持ったのか、を答えなさい。

Q・それが商品として流通している理由を、考えなさい

生徒は、〆粕に興味を示し、商品作物栽培に欠かせない金肥の需要が増したことで木綿栽培が盛んにおこなわれるようになったことに気付き、買積経営の展示パネルで綿に関係する売買をもう一度確認していた。そして、帆に使われている綿布も江戸時代の農業の発展と結び付けて、国産の木綿により作られているものであると理解して

いた。

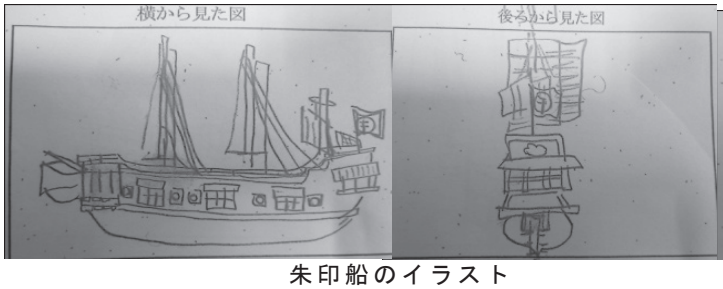
江戸時代を通じて金・銀が枯渇していく中、銅や俵物・諸色海産物が輸出品の中心となっていく。諸色海産物の中心が昆布であり、北前船が蝦夷地から運び込んでいたものである。当然ここにも展示されており、そして「国際社会のなかの近世日本」のコーナーでも輸出品として展示されている。この両者を結びつけて考えさせてみたいと考えて、「北前船が蝦夷地から運んだもので、鎖国下の日本の貿易に関係のあるものを見つけなさい」との質問をおこなった。生徒は昆布よりも俵物のアワビやナマコが中華料理の材料としてなじみが深かったのか、「銅に代わる輸出品として蝦夷地から干鮑やいりこを運んだ」、「蝦夷地で採れる俵物は、中国でも貴重な品物であった」との答えを導いた。そこで、「今でも北海道で採れるものは？」と質問をして、答えを確認した上で、買積経営のパネルに書かれた商品を確認させつつ、中国では昆布をダシではなく普通の食材として食べていること、薩摩藩が昆布を琉球経由で密輸して儲け、その金が幕末の薩摩の重要な活動資金になっていたことを解説した。

読み取る内容が多岐にわたったため、生徒がワークシートを書き終わるのに、ほぼ50分かかった。答えを確認しつつ、北前船の取り外しがきく大きな舵や、船の値段など、ワークシートにはない内容について教師が解説をおこなった。

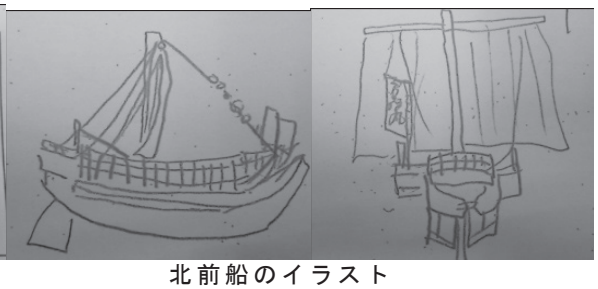
４．成果と課題

（１）実物教材の有効性について

これは以前から言われていることである。多くの教員が様々なものを持ち込んで授業実践をおこなっている。私も実際に様々なものを持ち込んで授業をしてきたが、個人では限界もある。そこで博物館の登場となる。博物館はまさに実物教材の宝庫であり、それを使って授業をおこなってみたらどうなるか、というのがこの実践である。実物教材から多くの情報を引き出すには、念入りな観察が必要で、朱印船と北前船のイラストを書かせたことも、そのための方法であった。これらのイラストを見ると、その特徴をよくつかんでいると言えよう。生徒も、朱印船が同時代の他国の船の特徴をとりいれて建造されていることに気付いている。そこから、当時の日本が世界史で習う大航海時代の中で生きていたこと、そしてお互いが盛んに交流をもっていたことが理解できたのではないだろうか。一方で、北前船が朱印船とは明らかに違う設計思想を持っていることに関しては、「外洋航海用の船と、沿岸航海の船という用途の違いが明確にわかった。」との感想を書いていた。



朱印船のイラスト



北前船のイラスト

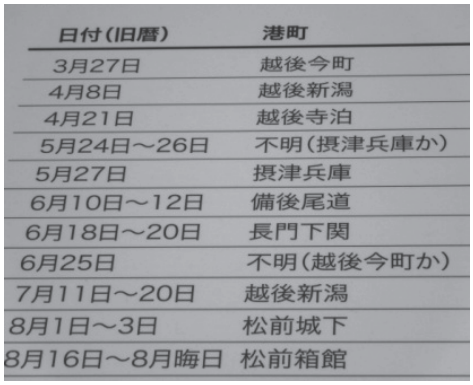
（２）国際社会のなかの近世日本

朱印船貿易から引き続いて鎖国下の貿易品を見せることで、生徒は生糸の重要性を確認していた。また鎖国政策が将軍の権威を高める面もあったことに、通信使や琉球使節を描いた絵画資料から気付いた生徒は、琉球が明の冊封体制に入っていることを引き合いに出して、それとの類似性を指摘した。その上で、「為政者が政策としておこなうものの根本的な概念には、やはり自分の威厳を保つため、という考え方は日本でも世界でも変わらないと思った（例えばナポレオンも周りと戦争をしてフランスの強さを見せることで、自分の威厳を保とうとしたことが見える)」との感想を述べた。この点で、鎖国政策が日本固有のものではなく、海禁政策の日本版である点に気付かせることができたのではないかと考えている。

（３）北前船から引き出せたもの

買積経営(方式)から何を読み解くか。

生徒は宿題の答えに「船自体の値段が高いのと、まとまった元手がないと買い取れないので、資本。あと、取引価格を調査・予想するトレーダーのような人。効率よく商品を運んだり、売買するシステム。上の２つと絡めて、組織的経営が必要だと思う」と書いてきた。江戸時代に新しい商売の方法が生まれてきていることは理解している。しかし、江戸時代後半には、地域市場が各地に成立して盛んに経済活動をおこなっていたことに至っていない。買積経営の展示パネルをよく見れば、蝦夷地～大阪近郊までの各地で売買をおこなっていることがわかる。従って、宿題の質問に、「パネルをよく見て、売買をしている港町の場所を地図に示しなさい。その上で、わかったことを書きなさい。」という質問を加えれば、にぎわいを見せる地域市場が各地に登場していることをつかませることができると思われる。



日付(旧暦)	港町
3月27日	越後今町
4月8日	越後新潟
4月21日	越後寺泊
5月24日～26日	不明(摂津兵庫か)
5月27日	摂津兵庫
6月10日～12日	備後尾道
6月18日～20日	長門下関
6月25日	不明(越後今町か)
7月11日～20日	越後新潟
8月1日～3日	松前城下
8月16日～8月晦日	松前箱館

買積経営の展示パネル

（４）今回の実践に関する反省

小学校や中学校と違う発達段階にある高校での博物館学習はどうあるべきなのであろうか。同じ朱印船を使った小学生用のワークシートでは、例えば「どんな武器がありますか」、「船の前にはイカリが付いています。探してください」、「イカリが２つついています。このイカリは何でできていますか」など、目で見たそのもの自体を答えさせるものになっている。高校生になれば学校等での知識もそれなりについているし、類推力もあるだろう。抽象的な概念も作っていけるという訳で、今回の実践では

①目の前のものと生徒が持っている既知の知識とを結び付けて、生徒が新たな理解を生みだすような質問。

②全く無関係と思われる出来事が、新たな事実をそこに付け加えることで両者の関係性が見えてくることがある、ということを体験させる質問。

を意識して考えてみた。その際、「同じだが違う」、「違うが同じ」をキーワードにしてみた。例えば、「同じ船だが、構造が違う」、これはテーマとなっている朱印船と北前船や、そこに付いている帆や碇の材質がそうだし、「時代は違うが物は同じ」、これは生糸などがそれにあたる。それぞれつなげることで、時代を超えたところで関係性を見せてくれるのではないか。それが、生徒の歴史理解を、点から線そして面に広げていくことになると考えている。

今回の実践では、生徒が持っている既知の知識と結び付けようと考えたのだが、生徒がその知識をもっていない(不足していた)内容での質問があり、こちらが解説を加える場面があった。また、生徒の提出したワークシートを見ていて、生徒が自分で資料の似たところと違うところを探し出せるような質問を設定できる個所があることに気がついた。

まず、最初の「朱印船とニンポー船を見比べて、気付いたところを書いてください」という質問だが、実践をおこなった際には、「朱印船がニンポー船と同じ構造を持つところをあげてください。また、それの名称と特徴をあげてください」としていた。次の質問も同様で、「ヨーロッパの造船技術を取り入れたところを 2 つあげなさい」という質問であった。これでは、生徒は最初から答えを知った上で船を見ていくことになる。ここは、生徒自身の気付きをもっと大切にするべきであった。

良かった点としては、解説を加える必要からも、ワークシートをやらせっぱなしにしておくのではなく、生徒と一緒に回って、生徒の反応を見ながらいろいろなやり取りをしたことである。生徒だけだと立ち往生してあきらめてしまう可能性がある。その時に、さりげなく注目する場所や、資料を見る際の視点をアドバイスすると、生徒は頑張ってくれた。こちらも生徒と歴史の話ができるのは非常に楽しいことで、いろいろな資料を前にしてワークシートには書いていない話を生徒と出来たのは、とても貴重な経験であった。教員である自分が、資料と会話をするような経験が楽しいのは当然である。ならば、それを踏まえたうえで、今後は、生徒も同様の体験ができないか、生徒がもっと資料と楽しく会話できるような実践ができないか、考えていきたい。

５．ワークシート案

第２展示室　大航海時代のなかの日本（15～17 世紀）

朱印船をじっくり見ることで、日本列島に住んでいた人々が大航海時代とどう関わっていったのか、考えてみてください。

朱印船とは､秀吉や家康から渡航許可証の朱印状を授けられた公認の貿易船のことです。この模型から、出来るだけ情報を引き出してください。

・作業：朱印船を横と後ろから見た姿を描きなさい。その時に、特徴的な点を意識して描いてください。

横から見た図　　後ろから見た図

（１）朱印船の構造を探る

壁のガラスケースの中に、同時代の他国の船が展示されています。これらの船をじっくり見て、以下の質問に答えなさい。

①朱印船とニンポー船を見比べて、気付いたところを書いてください。

②ヨーロッパの造船技術を取り入れたところがわかる点を２つあげなさい。

③朱印船独特の構造は、前方部の張り出しですが、これはイカリを置く場所と、もう１つ役目があります。それは何でしょうか。

④イカリは何でできているのか、答えなさい。

（２）朱印船貿易について

①朱印船の主な渡航先はどこですか、地域名で答えなさい。

②反対側の左の展示スペースに朱印船の主な輸入品が展示されています。その中で、日本にとって一番重要だったものは何か答えなさい。

③主な渡航先から考えると、これはおかしな点があります。では、どう考えれば説明がつくか、以下の語を使って答えなさい。

明　　朝鮮出兵　　出会貿易

④朱印船を通してこの時代を眺めてみた上での感想を書きなさい。(わかったことや、疑問に思ったこと、質問以外に興味を持ったことなど)

（３）国際社会のなかの近世日本について

①将軍のところへあいさつに行く朝鮮通信使や琉球使節の行列を民衆に見せるのは、どんな狙いがあるのだろうか、考えてみてください。

第３展示室　ひとともののながれ

北前船から、江戸時代の社会・経済をひも解いてみましょう。

北前船とは、江戸中期から明治前期にかけて大坂と蝦夷地を結ぶ西廻り航路で、日本海や瀬戸内海の各地の港に寄港しながら様々な物資を輸送・売買した船のことです。

・作業：北前船を、横からと後ろから見た姿を描きなさい。その時に、特徴的な点を意識して描いてください(単独で見て目立つ点など)。

横から見た図　　後ろから見た図

（４）北前船の構造を探る

①朱印船と比較して、その構造上で大きな違いがみられます。まず、後ろから見た時、北前船の形状は、朱印船とどう違っているのでしょうか、また、どうしてそのような形状にしたのか、その用途から説明しなさい。

②使われている帆の材質が朱印船から変わっているのですが、気がつきましたか？何を使っているか、よく見て答えなさい。

③北前船で変わったものの１つに、いかりがあります。朱印船と、どう違っているのでしょうか。

（５）北前船から江戸時代の社会を探る

①北前船の商売の方法は、買積経営(方式)と言われるものです。どんなやり方をする商売なのでしょうか。北前船の年間運航・売買例を記したパネルをよく見て、答えなさい。

②北前船が輸送した品物の中から、あなたが興味・関心を持ったものを１つ取り上げて、どんな点に興味関心を持ったのか、答えなさい。

③それが商品として流通している理由を、考えなさい。

④北前船は、蝦夷地の品物を重要な商品としていました。北前船が商っていた商品をよく見た上で、北前船が蝦夷地から運んだもので、鎖国下の日本の貿易に関係のあるものを見つけなさい。

ヒント：第３展示室「国際社会のなかの近世」の貿易品をしっかり見てください。

⑤北前船を通して江戸時代の社会経済を見ていこうとしたのですが、疑問点やわかったこと、感想など何でもいいので、書いてください。

※宿題①　買積経営(方式)を実際に成り立たせていくには、ほかにどのようなことが必要だったのでしょうか。たとえば、知識・情報・システムなど思いつくものをあげなさい。

※宿題②　買積経営のパネルをよく見て、売買をしている港町の場所を日本地図の白地図を用意して、その地図に示しなさい。その上で、わかったことを書きなさい。